歩いて発見。津の魅力

121

歴史散歩

高通児童公園（御殿山）

久居西鷹跡町の南西、久居中学校と久居グラウンドの間に、緑豊かな児童公園が広がっています。

公園の名前に付けられている「高通」は、久居藩の初代藩主である藤堂高通の名前にちなんでいます。寛文９(1669)年、津藩二代藩主の藤堂高次が隠居し、子の高久に津藩主の座を譲る際、津藩領32万3950石のうち５万石が高久の弟にあたる高通に分けられ、新たに久居藩が設けられることになりました。翌年から陣屋(藩庁)や城下町の建設が始まり、寛文11(1671)年に高通が入府します。この時、「永久に鎮居する」という願いを込めて「久居」と名付けられました。久居藩の陣屋は、高通児童公園などが広がる高台に置かれ、この一帯には藩主も住んでいたことから、御殿山と呼ばれるようになりました。

この高通児童公園には、高通の久居入府250年を記念して大正10年に建てられた「御殿山の記念碑」があり、この石碑は本体だけで高さ４mを超える大きなもので、歴代の久居藩主の功績をたたえる碑文が彫られています。

また、公園内には昭和３年に建てられた「玉井丈次郎先生彰徳碑」もあります。玉井丈次郎という人物は、安政５(1858)年に久居に生まれ、久居小学校(現在の誠之小学校)の校長を経て桑名郡長となりますが、明治35年、病気療養のために東京に移ります。この時、日本の鉄道王といわれた実業家、雨宮啓次郎と出会ったことが、後の中勢鉄道となる津－久居間の鉄道建設へとつながりました。また、東京滞在中に、陸軍第三師団が三重県に部隊を置くとの情報を得た丈次郎は、久居がその適地であるとして誘致に乗り出し、歩兵第51連隊の招致に成功します。これが鉄道の開通と相まって当時の久居の発展に大きく寄与したことが碑文に記されています。

このほか、高通児童公園には、昭和８年に建てられた久居町と本村の合併記念碑や、平成６年の高通生誕350年を記念して建てられた句碑などもあり、句碑には、任口と号した高通の句「躬やことし　高野にならば　花の春」が刻まれています。

梅雨の晴れ間に、閑静な公園に残された久居の歴史をたどってみてはいかがでしょうか。

御殿山の記念碑